



が独特の景観をつくるリアス式海岸となつて、陸中海岸国立公園が続くのである。

この日は人影もなく天は晴れて穏やかな陽気であった。紺碧の洋上を前にして一人静かな時を刻み、絶妙な心の流れとなつて潤される。

岩井崎に出てみると、この石灰岩化石は天然記念物に指定されており、石灰岩にうがたれた穴の空気が、打ち寄せる波の圧縮で鯨の潮吹き音にそっくりで、ときおりフウツと噴き上がる。名付けて潮吹き岩と命名されている。

さらにここには、大海原を前にして太鼓腹に立派なしめ縄姿の銅像が立っていた。この地で生まれて相撲界にその名を残した第九代横綱・秀ノ山雷五郎の像である。

横綱の像を前にしていいような感慨に浸っていたその時のこと、どこから現れたか、人影が近づき、いき

無名酔人の「祝い酒」

無断放浪の旅に出て二五日目のことであつた。格好よくいえば、オートセンサーの旅であり、共振共鳴のひびきに身を任せての旅といったらよいかもしれない。

車中泊と粗食に慣れての一人旅。生まれるも一人、死ぬも一人であれば、いわば一人旅は命になつた旅の原風景なのかもしれない。

魂の光を発しながら、あちらの光、こちらの光を求めてひびき合いながら、また蛍火にも似て波打ちながら、「縁の光」を求めて旅は続くのである。

この日は、新緑映えわたる五月一五日、進路は国道四五号線、一路北上を続けていた。車が気仙沼湾に差しかかった頃、潮吹き岩のある岩井崎の看板を目にして立ち寄ることにした。

変化に富んだ海岸線はこの辺りから始まっているのであろうか、複雑に入り組んだ湾



なり後ろから声をかけられた。

「あなたどこ…あなたどこ…」

何とも唐突な話であり、あいさつも何一つもあるわけがなく、くどくど聞くから「隣の山形県」とだけ素直に答えた。するとまた「どこよ…どこよ」と詰め寄ってくるのだが、これまでの自分であれば、「どこでもいいだろう、失礼じゃないか」とやり合うところだが、そうとはならず「庄内です…」と言うと、

「庄内のどこです…どこです…鶴岡か…」

と、今度は勝手なことを言い出した。さらに続けて「どこです…どこ…」と言うてはないか。どうして私はこうなったのか自分でも不思議な位素直そのもので「酒田です」と言う。「酒田のどこ…どこ」と食い下がるのだ。

身勝手千万で腹に据えかねるのに、なぜかこちらも凄く悠長となっている不思議さ。側におられる第九代横綱・秀ノ山関のお陰なのかもしれない。

「縁」になるからには、天は何かしらの役目を持たせたのかもしれない、とそんな思いもあって、そして「南新町です」と言うともまたまた突っ込むのだ。今度は「だれ…だれ…」と迫って来るのだ。この私の名前を聞きたいのだ。驚いたり、腹に据えかねたり、

礼儀知らずの彼に嫌悪感で一杯になった。

今度は彼から離れて無視するのだが、彼はなおも、頼みもしないのに「写真を撮ってやるよ…写してやるよ…」と言い出してついてくる。そこで問い直した。「あなたはどこですか…酒田ですか」と彼のことを聞き始めたら「東京方面」と言い出したかと思うと今度は一人言のようにして「ヤメヨウ…ヤメヨウ…ソレハイケナイ…」

と言うのだ。何かまずいことでもあるのか自分のことは一切明かさないので。「まあいいよ…いいよ」と言っただけをするのだ。

話しかけられたときから彼が酒気を帯びていたことは分かっていたから、そろそろかまわずに帰ることにした。が、それでも寄ってきて

「酒田のことは何でも知っている」と豪語するのである。さらに

「デンベエを知っているか」

と、話がかなり具体化してきた。それは名の知れた二カ所の商店であろうと思ひ「知っているよ、〇〇デンベエか」と言うと「そうだ」と言う。「親戚ですか」と聞くと「そんなもんだ」と、ポツリというが、何しろ自分のことは決して語ろうとしないのだ。その辺りにこの人の何か手掛かりがあるのかもしれないが、そんな興味は一切出てこない。彼は、少々よたついていて足取りで、人のよさそうな笑顔で聞きもしないのに

「今夜はここに泊りです」

と言ったかと思うと、さらに続けて

「いつも…一人旅なんだ」

と、呟くように言った。

肩にはカメラを背負い、足取りを次第に8の字にくねらせながら、やがて小路の方に音もなく消えてしまった。

天から降ったか、地から湧いたか、六〇代の格好の白髪のお齡姿であった。定年退職者で酒好きの一人旅姿なのかもしれない。そして本当に、酒田の「〇〇デンベエ」に縁深き人かもしれない。

この世に幸せの基準はあるだろうか。一人一人の価値観が基準であるからには、幸せと思えることでも相手にとつてはそうでないかもしれない。しかし彼はきつと今最高に幸せであるように感じられた。人生を務め上げての一人旅であろうか。昼酒をたしなみ、海風に吹かれて天下晴れての幸せなのかもしれない。

また、酒田は案外彼のふる里だったのかもしれないし、懐かしさのあまり、いろいろと聞いて心を暖め浸っていたのかもしれない。彼は幸せの真つ只中にいる感じであるし、
酒の精ありがたき酒なるかな

と思えば、彼は理屈抜きで幸せなのだ。それでいい、それでいいのだと私は思った。自分を明かしたくないならそれでいい。相手のことを掘り出したならそれもいい。酒を飲み一人旅を楽しんでいるならそれでもいいのだ。不幸がかつて愚痴愚痴しているより、こうして多少他人に迷惑気分をさせたとしても、彼は幸せの範囲にあるだろう。何といつても、彼を方向づけることなど不可能なことではないか。若者ならいざ知らず、人生の第一ラウンドを終了しているではないか。干渉無用の世界だ。

かくいう自分は、酒豪人生から酒乱に至りて、さらにそれを脱して心を目覚めさせての一人旅の姿ならば、この日出会った彼は何も言うこと無しのご苦労さんである。我

が身つねって人の痛さを知れ”の諺通り、自分に引き返してみれば思い当たること多くで、そこにはひとりでの人の思いやりが湧くというものである。

万人が万人、行く先は同じだ。魂の帰結は一大生命界の懐の中である。ただ行く道筋が違うだけ、彼は彼なりの行く道筋を歩いている、それだけのことである。

ここは、岩井崎（いわいざき）。ひびきを変えれば祝い酒（いわいざけ）と、ひびかせてみれば彼は一層幸せなのだ。ましてや此処は第九代横綱・秀ノ山関の出生地だ。大地は地響き立てて祝いのシコ（四股）を踏む。

♪ドッコイシヨ…ドッコイシヨ…♪

いわいざき（岩井崎）で祝い酒の唄声がひびきわたる。共振其鳴の酒のいのちがひびきわたる。

出会いに咲いた緑の花

私達の一生、生から死までを一本の糸にしたとえることができる。糸の色をその人の心の色にたとえて、人生模様を織り成す刺繡ししゅう絵と考えてみてもよい。その文様や絵柄模様をそれぞれがどのように完成させることができるかである。

自然の中でよく見かけるクモの巣などは、一本の糸で織り成す姿の典型的なものである。クモの巣は、腹部から一本の糸を出し続けて幾何学模様のエサ場をつくる。その場所を選び、風を利用し、枝葉を利用し、最良のエサ場を見極めていのちの糸一本でつくり上げる。

また、カイコ（蚕）などは、幼虫から成虫（カイコ蛾）に変身するために一本の糸を口から吐き出して、外界と隔絶する聖なる家（マユ＝繭）をつくり、その中でサナギ（蛹）となり外界に新しく生まれ変わる。動的幼虫からさらなる動的成虫（カイコ蛾）に変身

するために一度は静の世界に身を包み、一本の絹糸で織り成すカイコの世界もある。

我々だって、一本の糸で刺繍模様をつくり上げる人生だ。人生は一本の糸で織り成す刺繍の文様のようであり、表面で見られる具象（現実）の絵柄や文様の世界ではあるが、その裏面は、表面の現実世界とは打って変わって、抽象（非現実）の世界であり、容易に明かすことのないカイコのマユの中の世界と同じであり、一本の心の糸で織り成す人生模様は、刺繍の表と裏を見るごとく具象と抽象の世界であり、現実と非現実的な神秘世界の表裏であり、一本の心の糸で紡ぐ人生の刺繍世界にも見えてくる。

現実を裏返しするとそこには必ず現実の基を成す神秘の世界があるのであり、また、必ずあらねばならぬ世界であることに気づかされる。現実と非現実、具象と抽象、外界と内界それらはみな表裏一体で、離れられない不離一体の同体の世界であると考えた。

生体は、外見は当然にして見える訳だが、それらをつくり出すその内界の臓器などの構造は見るができない。命を形成する根幹世界はなぜか目に見せてはくれないのだ。人の運勢・運命も同じことであって、その人をその人成らしめる根幹世界は、生死一本の心の糸で織り成されているのだが、どんな凶柄が起きるかその運命的流れを知るには、その人の縁の流れを知ることであり、さらに、縁の流れを知るには、文字的・

数的・色的ひびきの同調性に心向けると、その縁の明かりが徐々に見えてくる現実がある。耳にしたことがあるかどうか、人生に三度のチャンスありといわれるが、その三大チャンスのことを本縁と読み替えてみると、その人にとっては大きな運勢転換ともなる内容に満ちた出会いともいえるのだ。

その本縁までの道筋に灯る、点から点へと運ぶ縁の明かりを、役縁という具合に考えてみたらどうか。役縁から役縁へ、点から点へとそれぞれを結べば、人生の一本道ができて上がる。鉄道なら各駅停車のような感じであり、俗にいう偶然の一致などは、いわば本縁までに辿る道筋の役縁の現象にすぎないと私は考えている。

「袖振り合うも多生の縁」というように、生死一本の心の糸は、どんな色の心の糸なのかで、引き合い、反発し合いをして波を打つものだ。それらの縁が役縁なのか本縁なのかは、自分の心の反応で判断するより他はない。

さて、風の吹くまま気の向くままの旅、それは、心のオート・ハンドル（自動操縦）の旅でもある。またそれは霊的で、より潜在意識を活性化させる一つの方法でもある。万人の心は微妙にその色合いが異なるものであり、心の色合いは一種の磁気を帯びているから、プラスとマイナスで引き合い押し合いとなる。すなわち、共振共鳴の現象を



れば、観光提灯まで揃うミニデパートのようだ。やはり、大間の港から北海道に渡る人々で賑わうのであるが、昭和六三（一九八八）年の青函トンネル開業による影響はおびただしいものがあるだろう。

このお店の娘さんは、話を聞けば生まれも育ちもこの地であるが、高校からは静岡県に出られたという。静岡の浜松が大好きというのだが、高校は清水の商業高校ということだ。高校にしてはあまりに遠方なので私ははたと考えてしまうほどであった。浜乃屋の娘が静岡県の浜松が大好きで、高校は清水市へ学びを進めている。

ところが、フェリーに乗り込んでから一人の青年と出会って話し込むうち頭の中はぐるぐると縁の糸で渦巻くことになった。彼は大学を卒業したばかりだが、ここ一年間就職を中止して全国を自転車によるツーリ

ば、歩いてでも渡れそうな小島である。

大間港から室蘭までフェリーで五時間の船旅になるが、出港までの時間でいささかの食糧調達のため数軒ある商店の中の浜乃屋という店に立ち寄った。

店の内も外も所狭しと乾物や生鮮魚介類をはじめ雑貨類から飲み物類、オモチャもあ



そこに見ることができるとは、その一例を旅の中から見てみることにする。

家を出たのが四月二一日であるから、あれから二七日目となる五月一七日（水）のこと、いったんは奈良県の高野山まで南下したのであるが急ぎよ、列島の北上を続けて北海道に渡ろうと思った。

ここは下北半島の太田岬であり、本州最北端の地であり、目の前には小さな弁天島があつて、そこに本州最北端の灯台が見える。二メートルも引くという干潮ともなれ

ングの旅に出たのだという。

静岡県富士宮市出身で現在は三重県の桑名市に住んでいるという。さらにいわく、旅に出たのは四月六日でテント一式アウトドア用品を携帯して、宿泊のメインはテントだがときおりユースホステルなどを利用するというのだ。そこで最初に一泊したのが千葉県の館山だという。その夜同宿の女性と親しく話をするうちその女性は三重県の四日市市の生まれで、静岡県の富士宮市に嫁いで来たのだというのだ。彼はそれだけでも凄く親近感を感じて嬉しくなったという。ところで彼の泊まった館山には、つい先日五月一〇日にかけて私も車中泊をしているではないか。

そればかりか私と妻は、数カ月前にテレビで知った一人の写真家、伊志井桃雲氏を訪ねている。そこは富士宮市なのだ。富士山オンリーの写真家・伊志井桃雲氏の情報は富士宮市在住というそれだけであったが、富士登山入り口で名高い浅間大社を参拝した折りに運よく出会ったS氏が伊志井氏をよく知っていたのである。この出会いのことを彼に話すと彼は、S氏は自分が小学生の時の先生に相違ないというのだ。とても珍しい苗字であったから印象深いとも言っている。ここまで分かってくると、縁の糸がぐるぐると刺繍の文様を織り成し始めたのである。この日の数時間の中で次々と浮かび上がる縁の明か

りが目に入ってくる。表面だけでは絶対に分からない縁の糸（縁エネルギー）が見え出してくるし、互いに語り合う中で縁の明かりが次第にはつきりと灯り始めていた。袖振り合うも多生の縁…とは、的を射て真実を言い伝えた言葉であり、また、命の意志性に突っ込んだ、深く畏敬にふれる世界を言い得た言葉に思えてくるのだ。

決して目には見えないはずのいのちの裏時計ではあるが、目に見える時計の針を裏で動かす時計の仕組みは、我々の運勢運命の見える現実と、現実の基を成す見えざる世界（非現実の神秘）に通じている。

目に見えるざる神秘ではあるが、それが実際には目に見えている世界だと言えれば信じてくれるだろうか。見えない世界が見えてくる現実こそ、共振共鳴共時の世界なのである。いのちの中を滔々と流れる縁のエネルギー（心のエネルギー）、運勢を織り成す縁の糸、泣くも笑うも陰で導く心の明かり。その心の明かりは、文字的に、数的に、色的にこの世の表舞台で見せ続けている現実がある。

この大間崎の港を出るまでのほんの数時間の中でも、出会った方たちには、糸が互いに緩なすやかに、それぞれにして有縁の流れを共有していたのだ。心の裏舞台の上では、文字性のひびきに溶け込んで激しく共振・共鳴する世界を見ることが出来る。それは生

命の根源的ひびきと言っているだろうか。そのひびきは、吸引吸着し合い、反動反発しながら、縁を結びまた離れてゆく。

いのちの絶対調和力（中心力）と、心の色から発する波動（磁波）が織り成す心の糸の刺繍絵である人生。それは日々の暮らしの中に織り込まれている唯一の心のひびきであり、物申すいのちのひびきであり、運勢・運命を運ぶ魂の機関車なのだと表現したくもなる。

心に刻んだ記憶や、日々思い続ける心というものは、圧積された氷山にも似て、魂となつて永々に生き続けると考えられるし、その思いの世界は、文字の明かりに溶け込み、数の明かりに溶け込み、色の明かりに溶け込んでいのちの中で働いている現実を目に見せていると思っている。心（想い）は縁の原動力となるものだ。そして縁は、その人の運勢・運命の原動力となるし、この動きをこの目に見せてくれる文字や数や色のひびきが今もまた、命と共に働き続けている。

出会った青年が青春を力強く羽ばたき日本一周の自転車の旅をする。その彼の一年間はいのちに深く刻まれて、揺るぎない輝きに満ちた尊い人生の基礎を築くものだ。出会いの縁の糸をたぐれば、思いもかけない魂の流れを垣間見ることができなのだ。

さてこれらの話には後日談が待っていた。フェリーで出会った富士宮市出身の青年、そして、同市在住のS氏のご縁の結び合いであったが、S氏とはそれ以後も年頭のあいさつ位の交友ではあるが、その交信を長い間続けてきている。

平成六（一九九四）年元旦には、S氏ご夫妻、そして長男夫妻と四歳と六歳の孫一同の幸せな写真が添えられていた。ある外国での記念撮影であった。ところが、平成七（一九九五）年一月一〇日付には寒中見舞い状となっていた。長男の妻が逝去なされたのである。平成六年一〇月八日・没。三六歳。（昭和三四年九月三日・生）とある。そこには戒名も記されていた。その後の平成一二（二〇〇〇）年一月八日付にも再び寒中見舞い状となっていて、今度は長男が逝去なされたというのである。平成一一年四月二九日・没。四一歳。とあり、やはりそこには戒名も記されていた。

わずか五年位の間、四一歳と三六歳の若き長男夫妻が亡くなられたことになり、残された子供たち二人は当時五〜六歳くらいであったが、今は、祖父母S氏夫妻と四人で心痛止み難きを乗り越えて暮らしているというご挨拶状であった。

そのような家族事情を知りつつも、歳月人を待たずのごとくはや二〇年が過ぎ去った。この度、二〇年前からの資料を基にして共時性現象（シンクロニシティ）の真実に迫

りたくこの原稿に残したのであるが、その原稿を書き終えた日が平成二〇年四月一〇日である。ところが私の内面深くに異変が起きていた。というのは、全く気にしなくてよいものに執拗に執着し始めたのである。家のパソコンでCDのインデックス・プリントをつくりたいという思いが全身を包み込んで他の一切は何も手につかない始末となっていた。ところが目の前のパソコンをいくら操作しても、むしろ迷路に入るばかりで何の解決もつかないのだ。

パソコンメーカーやプリンターメーカーにいくら相談しても、初心者であるから要領が得られずらちがあかないのだ。この世界の、なじみのない用語のジャンルにはほとんど参ってしまふ。最終的にインデックスを内蔵したソフトを探すことにした。「デジカメ de !! 同時プリント 9」というソフトなのだが、それをインストールしてみるとサンプル画像が出てきて、そこには三〇代の若い夫婦と四、五歳くらいの子供二人が飛び出してきたのだ。

親子四人でバーベキューを囲んで、娘たちはでっかいスイカにかぶりついて大いに喜んでいる。この画像を見たとき、なぜか私の心は閉じようとしていた。この画像を削除できないものか、と一種異様な霊的ざわめきが起きてきた。だがその操作もままならな

い。それが四月一二日である。

この日は私達の結婚記念日であり、それも四九回目である。来年の金婚式まで手が届くところまで来たという実感がよぎった。

ところがこの日の早朝、床の中で半覚醒状態の妻の目の前に、突然屋久杉の霊が現れてきた。千年以上の年輪を刻み重ねたその中に、はつきりと精霊の姿を覗いたのである。その時四時一分であったという。

そのまま起床した妻は今度は自室に入り身の回りの整理を始めたのであるが、ところが、どこへ行くにも持参している古い手帳の中から写真入りの年賀状のコピーが出てきた。それが富士宮市のS氏からの葉書であったので妻は、

「お父さん、Sさんからの家族写真がでてきたよ」

と言って見せてくれたのである。見れば、若い両親の中に四、五歳くらいの子供たちが並んでいた。後ろには、この原稿の中心縁者であるS氏ご夫妻が立っている。

これを見た私に電撃が走った。パソコンソフトのサンプル写真の若い両親と二人の子供たちがオーバーラップしたからである。

早速このサンプル画像を妻に見せてやりたいと思い、プリント印刷してからその日付

を見て、今度はいのちの中から押し上げてくるものを感じた。写真に現れたデーターには、二〇〇四年五月一七日撮影とあるのだ。

五月一七日と分かって、これは何ということかと思った。それこそこの話の二〇年前の出会いの日であったではないか。大間の港から出港したフェリーの中で出会った富士宮市の青年と同市在住のS氏のこの話こそ、平成元年五月一七日のことであったのだ。ここには言い知れない魂の流れを感じさせられてならない。魂の世界は時間・空間の無い一面一体の世界であり、一〇年、二〇年という概念は無く、つねに今なのである。

私にパソコンのソフトを探させて、親子四人の写真をそろえ、数の魂に溶け込んで、死んでも生きているいのちの証しを残さんと、時空を超えて、人の霊体を借りて、出会いの縁の流れに生きてそのエネルギーの波動をひびかせる。五月一七日の出会いと、二〇年後のパソコンソフトの中で待っていた五月一七日撮影の若き親子四人、それは、S氏の長男夫妻と残された四、五歳の子供たちの親子四人とそっくりではないか。

そして、長男の妻は一〇月八日に亡くなったのであり、何とその日は私の妻の誕生日、一〇月八日に共振共鳴してそのひびきは止まることがない。

さらに、早朝妻が観た屋久杉の精霊姿は四時一分のこと。S氏の長男は四一歳で没したとある。そればかりか今度は私が、四月一二日の四九回結婚記念日の朝から歯痛に見舞われ、三日間辛抱の末歯科医の治療を受けたら真横一文字に折れていたというのだ。何らの自覚もなく歯が折れるとはこれまた異様なことではないか。この日は四月一四日である。S氏の長男の没年齢は四一歳という。これまた四一〓一四で共振共鳴のひびきが同調することも見落とせない一つであり、以上のこれらは、霊魂の意志性であることに疑いを挟む余地がないと私は思っている。

それは「死んでも生きているいのちの証し(魂不滅)」の大事な一事例になると思うからであり、人が亡くなるとどうなるかという問いについては、古来、斯界の有識者たちや覚者といわれる方たちでも問答無用といったところではないのか。死んだら煙になるだけだ、という方もおられる位であるから、それは誰しも答えようもない現実離れした世界であろうし、死の世界に行かれたら帰れない世界であればこそ、それは全くもって問答無用であって然るべき話ともなる。

だが、たんに煙になるだけ…とか、そういう話はご法度である…とか、あまりにも人々の間からは敬遠されたり、真剣に耳を傾けてはくれない。ところがこの世界に直接結び